繡像
後響

岩見英雄録

四輯

七

遠
2509
35-28

遠
2509
巻 35-28

繪本復讐英雄録四編巻之七

二首の絶句は孝侍客の多情を感ぜ
三年れ古話折三悪梶の亟軒を憚る

登時野村種多い商人ふ對ひ怎麼唐人の陳奮翰沢い
立下只今祝記さんふ且毛唐人醫師といふいいろろ人ぞ
所まりとあふ主人紙ふらく這人い恁麼種姓那里の産
を知ぞ行まど毛栖家い冊波ろやろん一月のろろ表義
いろろ這人ぞ遠里下をろろまを取毛相貌い美相あろ白髪ふ
して髯毛く年紀い六十可と見へ時くい毛ろを洗へし
時もあろ酒家い林屋所堂と魯まて世ゝ恁義業の侍ふ
歌底をん生活と返行まと家風を嗣さく お儀のろろでい

留客を客とぬるのうち一日那人酒家ゟ宅ふ投客をとる
るふ酒家いわしも有よ左ぞ渾名の映掛ゟ預ひて老人
とらひ醫師ちまびとて言殺く止め管待しうち言ケ
藝儀の客と做りそ中業年ゟ仕まどもそ名と諸
と證ゟ毎も爲ゟて言へぞ但毋彼の採菜医者と知ゟ
ゆへとこまうさ什麼ゆへ屬遠彩を注是しゆと問ゟ
洛外の山々菜を採よ行ちうと言ふ大玄年の四月時候
小哥ゟ才時疫小悩そて症醫も亡を擲ら逢時採言是
那人ゟりゆへゟ晩掛の彩ゟ那よ名ある醫師名も故ふ
紹の言ふるゟうち所文ゟ劇会ありうち且那人ゟ而天
の病を苦て救ひを言へうそ彼ゟ一殄して剤を養

しに一日ゟて奇効ありて百して言ゟ疾ゟうを切て
うひぬ彩ぞま那人ゟ技価ふ湾まるゟもなく剤さへを
しの謝金を呈せうさへ菜剤の價ふまゟとゟて考ゟ九分
ゟ一を納め除まる金ゟ固く辭して色さを富まるとゟも
雜客と閑言居せぞ其情ゟう書を拿出して河歌ゟ智
時くい強笑しつ強弱つ壬生狂言を見ゟも仰ゟう信る時
有の美人ゟて髯さへ言ゟく神ゟまぞして婢僕们も終ま
唐人醫師と綽號して爲似ぬ遠他の渾ゟ濟幼仕ゟ疾
く手宮孫の決を狙徒仕ゟ但せゟ種事微笑てさ
らゟ唐人の狀拵を勧へふ拵所ゟへ拵れ拵糸皆耕村糸
拵僅滝拵不安とある二句の言ゟ那拵川ゟ堅木糸遠皆

掛村ろんどん京師ふちろさ地方ちるぐろも今戦國の海
猪さろ中盗賊ろんどの患あるて打寛ぐてい疾も寢ぐさ
しとの越ろう。前途第里山河遠須臥草枕行路難。
とい徒びあ途い海山まさ猿ろまいいうろることあるんも
帯まるい孤旅の身い結くを弟の渦雛をび用ゑせと
の戒の侍ろう又次の一首射化鼈亂千金弩自使情
釈肝膽ゑとの二句い行祈もろさ鼈亂ちぐふ潰
ろゑを郷ぐくふ帯ぐさ父母の老體ちる身を輕んじて
徐児们と閑ふしを倩ろう釈てい弦さい膳をゑしぬあ
ろろ一片婆心衆忠若休笑唐人凍奮翰とふい狗添
切ふ思ふ心をゑ苦ふ若る詞をび承解事唐人の嗟嘆と

と笑ろまるとろる意皆もつく主下ぐ血筆の勇を風流
せろ逢いえろうろ死好ゑの東ろまる独まび所林中か
主下を救ひしい遠人ろうと猿せ紙縒利鋏しよとい
言しなまま主下身ゑ病ろまども血氣の勇い人の悪癖
なり癖も一ッの病ろまび医師のろ救ろ医も理ろう又
那賊が狭地り自ら伏氣を撃殺せしい毒をん毒を制
ちる天の配剤いと妙ろうぞやと信まび主の所私も現然で
らろん酒家ぐ隷僕易吻ぐ今夜賊ふ術殺ましいえも
役ちくい行まど遠赤毒をんん毒を制ちる天ろの理ち
こそ他い途ゑ四下の多ゑさ者の独子ろて幼小ようち使ひ
しふ未嘉双親も死果て失怙孤ろまび一入情ゑ結ろ長

そうふ酒と色とふ溺りくのこう賭博を嗜て家業と
なく貨を失ふ程なる面でふ窘懲せど癖らぬ病剤さへ
小偷をさへ克して庖の金銭を掠しことも多くれど亟も出
さぬを食ふに成らで却て其の盗賊ふ倣暴く煮ふ刃乃
裡と微んも痛しと晩物が諫も理りうまべ共毫中の
扁橋ふ用意し丈とふ由乃せどべ冥りと他の揮償
外も遠転と竊ふ為ふ人名の行業ふ粗忽
みそふ結く悪りと扱こそ他を独り善さ庖終ふ所せ
容房へ為ふ一室の側を洒掃们が便室とは抜て易
きを屋ふ容措しが不意も賊の様ふ係りし分の結果を
商せと妻の晩物とを頼未を互代ふ説終まべ編屋折三
世ふ易物男よりも性悪き者も仍り又毒をん毒を制
する天の配剤と雖とそも却りい中まる洒家が分の上
ふ三歳乃ものの緯ちりと苛く命を活りしふ怨しき活
流あり言長くとも雪ゆくとそ疑記を縁由を詳ふ粤に
譜るふ寄る永禄九年十二月の時候那折三い主家ある
竹田町の機坊編屋小役二の吟味して機ニ人吐へ却をを
主の緒家を打巡りて貴若干の黄金を接て陥ふい西播
なる宍粟郡の小色墓系岸ふ来りうそも遠山い但る
摘磨の玉畏こそ山より北い但るの玉紀来郡こそ秤ふ畑
平野古肥山平新井色脱来市などの各麦を繰く赤
松下野守政秀律師則結より九世の孫ふそが城下なり山乃南の林原

竹田の街ふ到る為る行程ゑ里餘りやあらん系ち
遠山頂い間をまて坂路十八町の石洛迴の難所ちまび
組柔の人も稀ちるものろ時候しも歳の暮ちまび忘
惰まて打三い神子畑を打越んと疾路を厭そび辿て
坂のすをとるい牡鹿ゑ吹ろうさ共見岩上ふ八九
名の大漢子大燎を焼て擁遍身を暖め居光景香ふ火
影ゑ寵ふまろい緑林豪客の網を張しよく心着本陰
ゑ入く登提灯を吹滅つ路を忍して筒茶来し方へ立席
ろふ禁の方ゑも炬火ふ路を照して登り来る三ゑ名の人
影あり同じ伏竜の賊と見へて各自長き刀を横ろ打
標ふい今い死巷ふ駆入ろ造化精妙ちどいつ撃の疾の

源ふい猛獣ゑ寂莫ちるものゑ一人ろも吟ゆるまで
打三い作魂天邪ふ恥羞ふ入し嵐ふあるちび藩ふ幽邃
雑草の多を見ふ若りていうふせまと猜疑ても他ゑ通ろく
岐路ちく行つ廊つちるゑ禁の火影も消ろ万迷くちる
わどゑ非如身を捨てて浮む涙もあまと帽子を以裏を
しゑふ巾を被り四肢を縮め身を固めて下ちる音へ坂路
ろ眼を凝て佛号を唱へつ狂ば像ふ跳ちるふ荊棘ふ衣
を約らまて裂続び孔と傷を蒙ふて幾百級の涯の下
ふ須止りまびい美の心地してよを極苦を磨りつ進ふ
を乾も濡ぐろろ行ろふ山下ろ辿り来し苔経仏い
既ふ坂の半を打越て香ゑ燎の光を徳め時鶯の叫子を

ちぐみなわ三
山賊どもの

折三ゞ春日話
冥府山よ
山賊们
征客を
窺む
山そく们

吹呼せば那方の賊も呼子を合せ八九名の一隊乗小這ひ入
奈来つる小い什麼ことと怪しむる這是山賊什の接ぎを指
る隠密して羅網ふ被りし擒と云を畧くなりんの問話
休憩遠方の賊什い併りて是間より如雲如月ふ跟を尾て
這山ふ逃入し多の翼ちるまぶ他へ飛んぬ法ふ四牙什
が見ぬ見ぬとい云ふこと独潜い這所ふ下ふ隠まて屋を居る
ちらんと遍く探索捜ども絶て蹤跡を知ざれば一人
の小賊ど爺ふ提灯の光り明滅て見へしが確ふ這所ふ下まて
来潜まふ見失ひぬと云ふ這方の賊も走まて思ひぞ中る別
ず俺什這所迄くちら時小篠菱のさやくと鳴さて東
西の音石を投ちふい擲ちる麻ら猪の若ふ走りちら

向倣しが原来の楽奴疾く網ふ入しと暗り金を捨てこの
岩ちら若へちら時ちまと呼て流賊畜を切り大奇貨を逸
せしで悔しきといふを弦領品の賊が若しうじ大気力
を減ぜ若間へ多く石を投して那奴をば誘出べし倘ふ
ても出ぬと鳴もせぬば急絶てこそあるめ登時龍の巣穴と
小懲馬呂帝若什二名い亡牙の種さか事あまぶ約絶多
く準倣し樹間を潜ち若座へ下て那奴偏生て挿れ居るば
結果て金い生ちく撥攫て茅茨且砲石を墮さやと指
揮ふ源下ふ賊十弥名各ふ倩の大石を或い投ち又い鳴
ち偏東く鼓くとして地袖を敲し山箸ふ徹へ泉し家
数十の雷の一齊ふ震めく可きて若座ふ跳りする打三ぶ左

右の縁の左雲と眼前へも居多の巨石隨来うど身い活る
ゞ池獄ふ墮し男ひせう結り」うども幸みて崖の半腹ふ
生成りし駿多の大木庇蔭と做飛来る石の枝ふ衝らき
幹ふわゝり玉身に点ちゝ」ゞ志ゞこそあき漸ら光線も
羅めまゞ徐く遠首ゝ久留せゞ又徒麿る憂苦をや足
んと戦栗く丈御と踏結め周ふ絡まて石沼をちこと
初ゞて急ぐとすまゞ心情きて窮歩こ家ゞ背後ふ巨人ゝ
て衣領涼拿て挽庵さる心地して蒙昧とゝく衝らしい
邪孤の逃るゝも仍ゝ結て終疾山路を冷ふゞついい
ふ途もゝさ峯ゝ峯に巻ひ入り精神恍惚として身い
弦殘脚い酷く疲まぬ左右して一庭の佛殿のある寒殿

嘯表ゝ什麼神ゝ佛ふ在ゝ初ゝ孫ども遠ふ紙疲ゝ天明
て内路を索んと養廊ふよるふ山郷の荒壁ゝまゞ猿とても
猿とせざんゞ苦掘刷ゝる古廊の自然閑けめまゞ壁中ゝ
入り初慣ゝ身い挽落ゝく準備の煙袋を揺りて火
を遁出ゝ左右して情ふせゝ挽灯の殘焔ふ照して扉の格
ゝふ狗ゝ措慈て知るゝと知るゝふ素布帷の中に巨大な
閻魔王の石像を安置せゝ蛇ゝく儀ゝて誓首終ゝ
憩ふふ縁い孫益耐難ゝる遠く絡困ゞめまゞ焔を滅して
寢んとゝゝふ疾意の風ふ変ふ結ゞまゞ眠ゝも長く視
ゝもゝゞ壁ふ小疾の深ゝる徒ゝ知ふ猛可ふ人数して
林と出る姫夫の遠閻魔堂を指て途く来るを扉の鏑ゝ

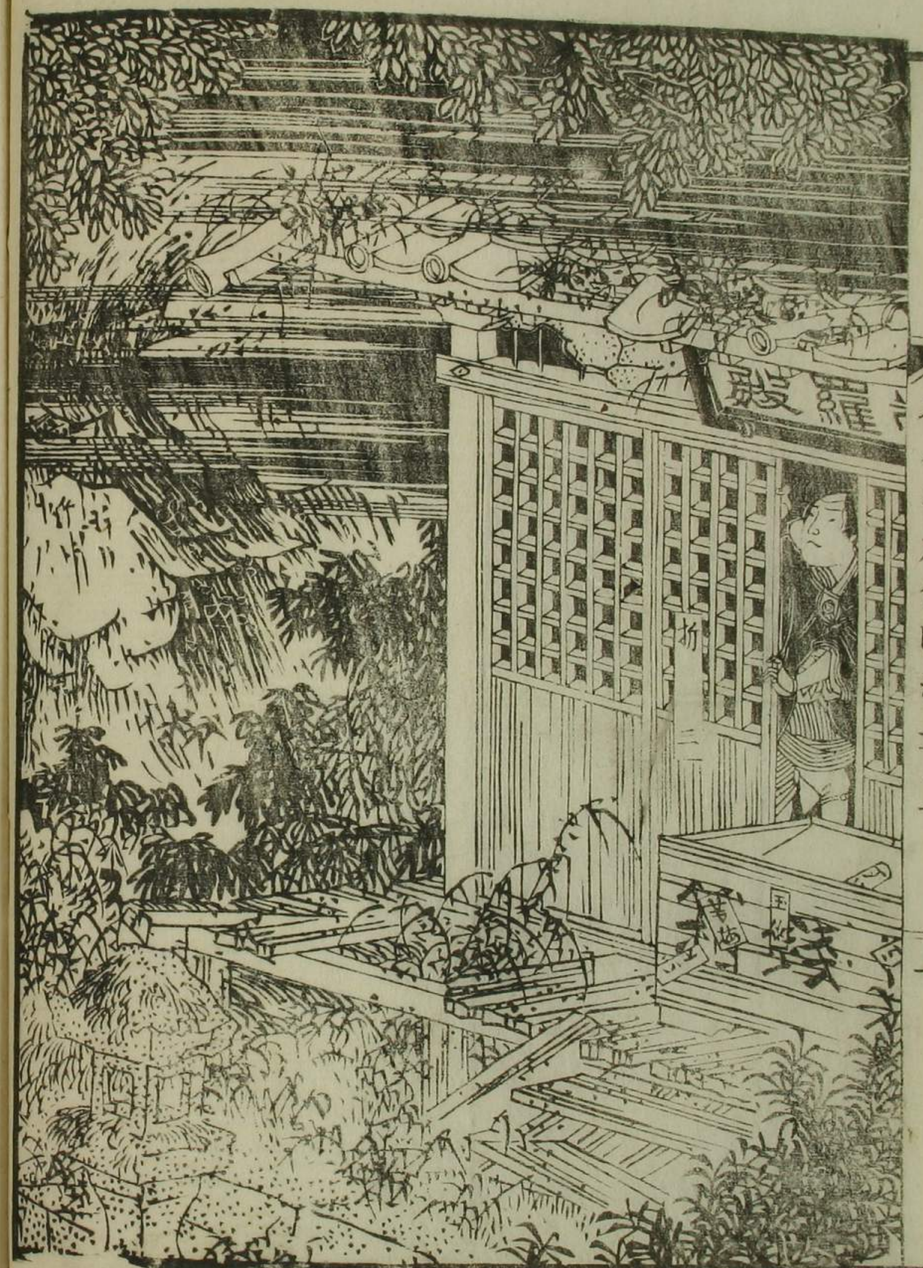
寵へば一流約莫十餘名こそ面貌猛臂虎鬚のお軍ちう
なぐ那里嶽の洞王ともこつづき山豪の鹵薄なり折三度び
繁くして道出んとも既ふ冥途ふ迫りめこそば南無閻魔大王
大慈悲と唱て一世の泥雑敬せめくと唱も敬ぞ布慢を
寒げ那石像の背後ふ身を隠し息を屏て居ふちん洋の
一流の賊们既ふ壹中ふ入準備の焔毒大なる煙焔を題し
て中央ふ拵ふ居る一人が上座ふ居べ色地蔵ふ似
を逐て固来せう慈て一人ぐ言ふ言ふ道化ものさ今者の毒尾
ふ楽奴那邪へ逃しや隠しや慈求搜せ〜に蹤跡を知
ぞあ〜工夫暑れることあふ侍の一人が龍さる悔そあの
渥ふ苦座へ跳〜ふ凄〜ふ跳まるもせよ長と傷ふ

背を撲て自由ふ走り雑〜ふ人の名ふ言ふ
屈〜てぞ探居べ〜拵洋の大金とふ工夫〜て止ちんや
今一回索搜て居んと少打三い今ものや索〜出さるやと繁
根盛毛凄倘爰なふ癸碍は」と閻魔の像ふ楚と絶
り活ふる心地ふせざりそう登時上座ちう」賊が頭の髪毒撥
つ馬冥帰歩踏〜那奇貨をば攫得ぞともこめる表三夜
の夜鑿ふ大利を得く攘せ〜黄金千餘表ふ及びめこそば一
且陸りて大頭気へ攘を量出べ」然也斛首へ五百両餘を拵出して
残る表百表餘い俺と汝等と私よ這里ふて配分せん丁い寛〜休息
して云計せん且爺ふ伏家ふ入んと清雷〜体動をも
をを虚実を糺〜試ん嘸遠里まで来〜ちを什麼をる

男波が種性来歴及俺們が伏象ふへまく歌をる都意を
辭ふ譚まこやくと喚途まび年紀三十許の男魁頭乃
痕黒ゆに伸しに鬢い世髪はけく撲り程申鼻いろどく
見しまこ山繭紬の小横を穿て桃紅ふ褪し緋の皺紗の三
尺帯を締びるが河宮るまなく未班の賦の背後より猿
紛いで洒象い本國氣多那山本の農人某甲が子動左衛と
喚まこ者知さより放蕩の生質ゆて農業を好まず後
い酒とまとの好むふ嚇まを博徒ふ交り仮言をれて人を
欺まを借得し東西い衣まを殊まを色をとるく分を拐
懐せる經郷人們も洒象を跡を動左が分の未路ハ亥年
ゆい紛ゆと云ま年竟ゆ俺名ゆ一字を冒が世伊動左

くと卓號せしい伊と由の俗名い智途をればゆゆんゆ
俗て隆理恥を俵ゆまゆまを親のまだんの寓くねば藻ふ
栖出のゆまゆまに客家を刃人涯りつ出て吟ひた右をゆる
ふ結く困窮せしかどふ出石の塚下（國主山名右衛門督源
紹熙ふ改め入道宗清ふ敗め紀伊法豊居塚せり後）ふ面う心を更め一業肆ふ勤め
が囘候をまて贄を言るく初ひ又も酒ゆの日病発り例
の賭博ふ耽りしくば結く象ふふ遣責さ是後発しまふ
一夜店ゆる芸妓人参ゆんど價者ゆさ業種ふ世の金銀
も奪略て出石を出奔しまを後伴の貨を賣却て
まびしい碧海の餓鬼を免まをうど始終を暴りて養父
那蕎又市場ふ藪崎思庵といゆる流行医師の僕と做て

折三
陶麿堂ヨ
再び
賊徒避く


折三

年を経しふるさとも故郷忘る山中の人の来りしかば酒肴を
思ふく出養生の歌店うて喰藪漕めしの世ふ人も多
くふ俳諧をと懐ふ石使ひ純ふ茶を商し歩行が毒ふ
や微ん菓子よりも微じきるどゝ暗りしがふ晩とるく四
をの人の言絢せ那男庵坊も恵さ風多ある者を使ひる
い家業の拒撞しも微べくれと猛可に酒氣が身の暇を
報しくべ即時ふ至と繻をて小可感冒しもや心地あく
結り和今日いわ息結り明日い発く保人弁ふ羅ら結ん
と義へしくべ移可急ぐ要もあるじ只使約の嘆る人を
減せるまでらまべ夜三日晩くしも行くいあるん心寛て憩
ひねと宮例ゝる菊振湯二三貼個合しを拾葉の標い字紙

ふ裏て報しくて葉ふい似如甘を純漢と氣丁度ふ蓋り
てを疫艾葉籠と衣装を編をて立立つ根を立ち市に
弼尚ぶて資ふし再び博徒の雅ふ入如拙きを曾い遠化思
く今宵も明延の振山ふる賭物の席ふ到ふしに言葉る
く揄ふしての物語遠四ふ石の各位の酒氣を見てすらや
須臾ふ立を金い勿論衣も中刀も出しを地まと囲擁るふに
言ふ一生涯博徒素人倫四見て暮さんい言材惜し連
山氣ふを皆の四源ふ属て操んてを夫丈の約ひふまを
変ふ縷刀を擲出し情所の計を清中しふまを年四源下に
加へ石使ひめひねらし酒氣いまぐ武勇の健剛い試をを
組ふうしてふ膂力あり智謀ふ始よりせし如し列座の

各位儀をぬい新しい魁へ出船流れ寄ると若首つ
いでくと清ふろう
伊雁太夫節を愉て時ふ他日の禍を生を
新十郎竹笠を截て長く一代の誉を留む
長流寄右衛ふ上座ろう」大澤みうち領を素人幸流
し和郎が魂及所あまび駿汁ふ入ん行き新条の孫下
い新への勧めあり毫い豪冨の宅へ疾疫ちどの時いその
家の和面ふ立く狐落ちく四方八表を及巡り悔事を
う個臣捕役ちどの来ると見てんび逆く時歸の呼みとろて
私ふに伏家ふ敷せ或い徳遠堂者ふ憩ひあるひい行厨ふ
板を縛ふ時もまと行ろう嫌び雁の啄を又い眠る時を戸叔

あるぐ」とさまべ山意をろて和郎が名を更めて伏家に
入ん俺ハ根幹曲松と喚ろく一隊の敵行ろまび親をに乾
又とろう乾児とて俺称號を和郎ふ授ん根幹伊戸を
と名乗く大敵領ふ渇ぐ」魁首の雲名も又その四雁する
あも伴ん時よ知ぐれを遠里まて流ん い要ろれ伏家に
入りの和郎が闇よの働さに餐く那里へも行く酒者と
調来ね更闇れど和郎が才を試ん闇沙ふ愉しと少めまび
情ふ徳を」ん小懺よ他ふ酒者の價を遍嘗ねとりふ
馬四郎を乞て碎狼子義策を帝に捲り」解ふ十繪を
猪を拿副て芝油い勿論塩も味噌も庫ふ雷め来らねと
出ちを伊戸冬接りていでを一を一を滝来りいん斤物等

せぬへと云つゝも多くぞて堂と出て紛しと目を了し龍集
明を純の賊もりくに小頭領曲松殺てその志麿が事も張子絨
さゝる那奴がりを信宮て釈しめふとくゝとそび傳ゝも
亦心も紛ゝぬ新附の酒者の亜とゝて金絨多くゝゝゝれ
しゝ掘元せんも弱り雖ゝとゝを抑ゝく小識馬冥加いる
そゝゝのゆふ狡落みんや那奴が中刀俺這墨ゆ彩り横ぬ
見ゆ把鞘とゆふ白金製みゝて鞘哭り赤精好の浪し
箭ふ蝎のひゝて辛と豎釈ゝる刃り赤新刀ゝぐゝ狡
和と見へゝゝ約莫絃計ゝれば金ゆ可の貨と這ゝ
抑ゝて貨とせゝと打知ゝび根幹曲松隊下の小偷仙と偷
して那奴ふ根幹と紛へゝゝるゝも這俺孫騙みゝゝ狡び

時へあゝじ大張領の俺仙ふ遠嘗措ゝ身節ゝぐゝて緊
要の東西ゝゝゝゝ妄ふゝゝゝゝ言ゝゆまび隊下仙ゝ身節といいるる東西ているる
要ふ用ゝゝゆゝせぬへと靖霊まび狡び這身節ハ那里に
ても力量武義所ゆ傷ゝゝる豪傑とゆる者あゝび該
作憑憑て形方ふ附しめ亜ち下伴ゝ来るふ便熟ゝゝ
縁由もあゝび矣日俺掲窟へゝ僧ゆ来ん信の嘗ゝゝし
ねゝゝと大張領の吟附ゝゝゝも身節といふハ唐ゝて
軍兵使徒の信ゝて生形ハ洞ゝて作義の像く製ゝゝ
席を脇ゝ二ゆ剃てゝ一片ハ都ふ留め一片ハ那縣の皮
府ゆ措ゝ故みて兵を時ハ皮使ゝ半片を賜り扶紛

てを府ふ留め一片と合せ見て差ふてとるべきを地方
より軍兵を命の如くふ調発を遠見報逆の徒の矯て
兵を石集ゆるを防ぐ虎を脇いその糧を歌してなり
今我魁首の見を用らくいい備紹介も安くて祈方ふ属ん
と尋る者い塞中ふ入ぞ生てもをそ遠諸方の西郷郡
主の写牒児を防ぐ用をとく徐き於兎い　皇國なる獣
ちりをを用んより庫狼と連よりへる糧獣ちるを俺身い
ホをん製り狼を畫くべしとて多く造らせを一片い急
く魁首の弾ふ留め弦行ふの甲乙へ遞ちんしい見こ
と懐より袖嚢を揚り出紐解出ちい長み寸可ふ節と
籠ち竹筩の半片を示せい大象河舟しく光沢よく

磨き作ちをべ脳を欺く佳ををい有ちをどの狼の
画い磨も滅しや跟も乃へぞと少く曲れい折ちへ流思い
肖程宮く丈ここ魁首の兵と用ひら巳紙蓋ちれ寄方
の葉をん畫をし作を二ふ剖裏ふ甲乙身の字號を篆
文ふ烙印しをを阿芙蓉といへる毒を主とし他ふ三
四味の秘薬を加へて薬水をん煮時い作の肌理よく緻
密て重くいちち孫完然石ちり堅く破裂の患を扱見
と合せ乃ちちい赤一寸方の葉ちを溶して拭ひ乃ちり又
別ち帛紗ををかをちくひちく乾し措ををん拭ふ射い
自然繊い乃まて半晌可が間ち消失て痕を留めび象
象とても然ちりと薬ちを耳ち流をかりひも生で秘事

を湾曳ふ就つく術く情へ角義を細めて打笑ひ問話
ふ緊要の縛と為き居し絶しさま俺伊戸冬ふ使さ
い好意みてのことなくば曲功を無き新附ても人数ろ
生ても配分金と渡させんい要ろさふ那奴亦矣日魁
首の心を攪んとて笑はも心安ろねば出く従て結果ん
無ろさ龜と小懺い登張行て那奴が胸務と名受て打
殺し酒者と狂まる金銭を攫て胸ろ孫必要伊ふ畑ち
他へ行べき地方いはとしめること龜隼助小懺馬冥帛意
も教ぞ知面さして走り行しい三文ろ比ろ比片畑も
あるば伊戸冬い一樽の酒ふ嵩掩下あを換へて胸ろ来る
ふ曲松繁くさ什麼松邪を言ひふ集外と馬冥邪と言

僅中しふ逆ぶ申と汗逆び否洒島い遠頭い縁し地方ふ
逆び別ふ捷徴ろ神ふ畑へ結量せしふこそ結答ろ送
て逆人くい路遠ひめ逆び胸ろい家も晩ろんとくろに
什軟逆ひし根幹曲松悔しく物へど且十分ふ那奴と
延使て后ふ結果ん容もあまと伊戸冬と言らひつこ申く
酒を烟め青も烹せこと吟味ふ賊仲間の行庵畑
渦風炉ろんどをこんろぞ伊戸冬い者の一隅と庵丁戸
ろ和ふ出く逆和ふ逆し庭石の長さ三尺闊二尺可そ
厚二寸旅もあんん深園の面平ると換配し来て板間ふ
指さ又鑑の大ろる石三四拾ひ来く出ろ上に按排し即時
ふ行竈と築ふろん曲松と首め大家邪邪ゞ力とろひ対

も実ふ孫く重くと養孫をもまび伊原を い鼻養し遠
乞博徒と乞食の慣し業ちまと食矣て外面ふ出落葉
柱柿を搔集め来つ伴の窓ふ挾揭を掛澤めて三四笹
の苞ふせ〜表ふ粗覆ひる油家の裏を各解てゆる
柱魚緑鴨莫鬼の禽肉を烹ゆ〜矣もするま由三名の小
熾も乞鬼の菜蔬と美と〜或い酒を烱〜と伊原を遠
洒氣ふ任せ打措せ由ひぬと頻ふ譟をんば初ってあま後
い皆伊原矣ふ妻任せて筒の席ふ寄め有た右而賊の更ま
憑ゆるさ中の酒醪も且曲松が畳を圍座ふ迎ら伊雁
を乞乞婆尾畳ふ居と濡せば曲松い伊原を和帝い今
夕の庵丁戸ゆり廚ゆ畳て酒も有も自由ふ飽嘆ゆ〜

遠首い櫛地板ゆ畳び火と燒ん由も邑乞首い却て燒
温なんと退ゆせ各重を別ゆ〜て牛候緑呑痰を忘
き奥硝ゆ多へゆふ多ち二名の小賊林托地と矣邑猛ふ
狗板痛て耐雖しと作ゆふ京賊鑿き菜を食ませ投
却つゆる間ふ怪哉根幹曲松を始め〜て十名賊斉し〜
面色変り手足破麻て嘗苦〜遠そも揚動〜ゆや
舌も強亟智凄く内絶掉れ〜宮然い閻羅の宮舜眼
和ゆんる大呼喚の地獄の苦ゆ七廻八倒して狂ゆ〜ゲ嘔盍
をつきて死てゆる南下根幹伊原太い起牙来て彼此と熟
視て完ふと美ひ驚く行ゆ逢邑俺汁較強て菜驛と医師
汁ゆて偷ゆる麻茱と泡煙石い妄ふ賣却ゆ〜ぐんば要も

賊を誘ふに
賊のまを假る
毒をもく
毒滅制ず
天公の妙手段

あるんと今までも蓄へ措しを今青初め一二献のうどん
尋老の酒と喫りを孔明小刻を寛ひ那蒙汗剤と毒薬を
ふるふり酒に打入烱めて喫そせんだこそ童子の葉と
做めと独酒且已が極力と拿揚て腰ふ佩て歩こまり根
幹曲松が尻の懐ろる皇紙嚢をる玉をる那綿の嚢も
高しく出まこび被さ刀を伴の身節をよふ含つ遠い
付麿の要ある東西ろうん茶博士などの用器みやた
も有も俺よに絢しものを拵る法いはと惜よ地ちめ
剥へ曲松が身ふ寄ろる蹤の柔細須の肚甲烟ふ腸面もだ
ろて布襆ふつこと拵きろく手を首を壷搜刀て一千体
面の黄金とも奪略遠十二分の造化精粉と蒙嚢ふ

毋いくぐこ宵ふ負つ褄ふ縄ひ出んとせしが停立否
こ十條人ふ喫せ酒いろく毒い分量みろうろん猶
も那奴们の中に蘊生者あるべ后の害と做めべし非如
毒を喫ぐ血を強ぐしとひつく中刀接脱し曲松及
小偷児の尻の首と撃落し或い徇脚を制貫る今い
心安ろうと呵くと打笑ひ眼蹟を悔を白波の立田の
山よあるべ孫ども手紙ふ費数紅葉をも欺く血浸の接
板ふ半足茅屋の跟とのこきして出る大猴安故の兇
賊が出没懸しさ拳勅を賠ろうして石像の背後ふ縛
し折三い所もしつ偷視めして且懼き且吊き俺牙も毒
酒ふ中り係ふ全牙の筋骨破楚し心地して冬疾ろぐ

貴を汗ふ濁しゝが蛮這間より逃まんと出んとするれども
又龍華助小懺馬四郎の二賊ふ面より什麼伊右衛門
路や差ひ弓雉弓く新さんぞ為ばうくてゆるめと
ゝつも扉を開さて入　るゞ板戸を潤を血ふ滑りて仆ん
ゝて踏停り這光景を見て大驚きさ四目斉視吉を
ぎゝ何もゝ見ぶ集助蘭ゝて小懺怨麼思ゝや林整
鞭藉ゝる中に移家のゝ麈ゝせゝ一ふ作為の金ゝ
這入全く伊右衛門奴が帰来ての訴るゝんとゝゝ馬四郎
も徐ぞゝん麈莫小弦が言ふ及ぶ彼他の甲乙が伊
右衛門ゝんど一人ふ怨振易所屠ゝまん容いゝ見ゝ
就ゝもよれ刃も拿ぞ口より血ぶ吐ぬ泡ぶ後ぞ那奴畜に

蕃騰と医ゝ為ゝて菜を多く喻しと嚬りが扱いを結ふ
偷し毒茎ぶ絡ゝ居ゝの計略ゝ伊牙と俺も遠里
小走ぶ作ふ毒ふを免まじゝを嗤ゝ作ゝを命ゝ
ゝと命ゝく嗟嘆ゝ慌ぶ怨家の尻を這作ふ措ん
も新護俺東西ゝ称ぶ惜くもゝぬ遠荒巷いざ放火て
乞りゝぶ自然の火葬ゝゝと弦忍亟慙の賊の本性右り
ゝる巷の西廉撃狡ゝ踏破りて他焼煙ふ徹ぐゝ東西
と巷中に積巷ぬ火を接して燃も措きゝぶ走ぶと二
賊ゝも外面さて走出ぬ行ふ煙消ゝく巷中に酒焔熾
ふ燃んとするゝ打ゝ今ん耐難て閻王の像の後より跳り出
て和面へ乞り紛怎麼して消ゝく思へど家牙とひこの

四方よりあつまりきたれば術なく者ども向つて伏拜て大王の宮殿まで危難を免まゐへども遠火を消ん術もなし洒氣備幸あつく發逆時あらば森羅殿と乖違結ぶべしとんよ拙い紙うつ霊疫の星る路を求めく辿り者る那里い猛火燃くとして焔天と焦せども山法の人知る函丸なまび救ふ者なく風の法を焼失ぬ遠時已ふ寅の方刻ろれで天を消く吹くむやどふ打と弥便甚清く慶爰の紙ちく醒し思ひうて岩ゆく神の畑へ出く消しとぞ遠祈三ら活まる一件の却を詳ふ宮匠ゝうう余ど絡屋折云上ふまる繰どもを潭り出て伊原を い易仏男ちどくを比雑を無者うてきが奪る山賊们ど毒と領まゝん有

理毒をい毒を制ちる宮殿みてをとりつる主人作松夫婦いるも交ち娘们も寄譚ふ耳を歌つ火釜を囲り忍懼と疫を ふ縁のおむを覚めとふ巳盛ど巳終きぬ中も那村新十郎猛者い那賊们ど大乱ばとをを行磨歌者て那里ふ栖ろい幼ゝ孫ども芽郎をん業を拓んとををい大志ある者ら金ど今疫相入し賊も那奴ど隊下をゝん強ぐい二丹 丹波丹後と ふ但る因幡の加て三丹 搆ノ但る因幡の ろる景窟を撞る紙をん丹波ふ波多野丹後ふ一色播磨よい赤松別所但る因幡ふ山名をんどの列侯名家豪族ありちどゝ乱世の出しさ結る人民の患ゝる賊業と窮索し撞壊をることを乱ゝと独心ち

嵯峨しぬ進ら易らん伊丹ら登る伴の翁節後く
種季ら[illegible]て竟ふ丹後の国ろる由良嶽ふ種威
と震ひ〜大賊帥の野村ら謀略ふ誘されて魂抜郎て
鏖ふ滅んとハ徳く主人ハ人〜ふ早疫の病ろふ途くい有
と且ろ〜想ひぬへとて新十郎と打三主僕と筒の所
宮へ入しめ他の僕して易ら屍を収め詰且墨西の海へ
緑由と流へ〜る墨西ろ又ろ府逗をしぬ戦国の縛ふ
あまバ来く換屍の吏人来ろて縛抜易くも清ふ抜せて
宮〜ま〜ろれで易吻い勿論種季ふ斫ろまし大江鬼既を
及流抱ふ傷を配しろる賊ら屍とも材尾の野ふ埋ろ抜
まバ遠般の一除をゆも伝へしく人〜遠林屋ふ来ろ那蟹廊

の苑竹の半とバ支吸ふ縄を拽し如る一文字に載しと見
て又の祝味季の所現ぬひろ〜ろ〜ろ〜と呆るまでに
種季ら咚煉と感じて後来まで〜ひりて約しろどふ
種季ら兵揮一揮せ〜刀痕の生き誉を留しそ遠
見後日孫ろう徳り種季い半三日ろり十二月十
又日ふ皆掛を発程て約くも那唐人医師ハ怎麼人の
世を避ろうや心憎し丹波ろ栖と所ろハ那国て潜の
ろバ約ろ由あ〜ん一回ハ射面して救阪の悪を射し旦ハ
そ素性をも捜りてんと心ろ統て急ぎろり必竟種季丹
波ふ入く後の法いいるそハ編と嗣ぐ弟ふ揖ふ説ん

玉藻浦人嗣編復讎言岩見英雄録第四輯畫師刷人目次

出像畫工　一鶯齋歌川芳梅

剞劂　樋口與兵衛

繡像復讎言岩見英雄録第五集　七冊

本輯ハ野州新十郎種季丹波國ニ入リ桑田郡矢田の奥ニて山崩ルて溪川ヲ塞ぐ大石を拾ひて民田の害を除却し岩見重太郎ヲ召ト知て詩を賜ひしヲ種季ハ人野州新十郎ハ則チ兄用出ひるヲ浦上室二郎宗高ニ嫁婦岩姫ガ姦悪牧野殿衛義行ガ狂死のヲ義行ガ女夕月その家源二郎義雄ともに種季ガ資財ヲ預テ父殿衛ガ寃家を撃チ一ヲ種季絶ヲ倶戴國湯嶋ヨ到て仇を窺ふヲ年餘奇縁少クして發覚の日を待ヲベシ　文栄堂主人白

安政三年丙辰歳春正月發兌

大阪書林　心齋橋南久寶寺町北ヱ入　伊丹屋善兵衛

同　北久寶寺町南ヱ入　河内屋源七郎

軍書小説類藏板目録　大坂心齋橋通南久寶寺町　伊丹屋善兵衛

源平盛衰記　片假名　廿五冊　後太平記　片假名　廿五冊

殘太平記　同　十二冊　四國軍記　名土佐軍記　同　十二冊

駿臺雜話　平かな　五冊　續武將感狀記　同　十冊

室鳩巣翁の著也ふすて仁義の大乃を説て鬼神の説和漢古今名將勇士の去就を評し治乱の要諭仁法和奇侍文の諭儒老儒の鬼あり

聖德太子傳圖會　平かな　六冊

楠正行戰功圖會　平かな　十一冊　畫本西遊全傳　四十冊

太田道灌雄飛録　六冊　繪本玉藻譚　五冊

左衛門大夫太田持資貞入乃ち深三位ル政鄕の後胤ニて扇谷上杉氏の家臣ニ文武の英才を秘ス聊ニて一世の戰功忠義を委く

同白狐傳　一名吉野狐傳　十冊

復讐岩石見英雄録　全部五十冊

此書三編まで八作者各晋ち四編以下廿九冊
一家の手筆にて記せり岩見氏をもて通編
結説の主人公とせんに勿論りて給木堂の五傑と
称する勇士の伝なりて田良山樹の賊後討治天
誅立の復讐ホ頗る作者の新案を費せり
七編に結句にて総計の一巻あり八冊をもて一部と

刀筆青砥碑　八冊

同　雪鏡談　十二冊

同二嶋英雄記　十冊

同彦山霊験記　十冊

同亀山話　十冊

同合邦辻　十冊

同浅艸霊験記　十冊

蛍本堂の八雲　八冊

下野国生の岡城主生駒の家臣平四郎国紀
新平左衛門が妖術妖婦夕顔
忠心遠謀のふ
べき生駒平左衛門が忠孝を面白くしるせり

世俗のひとりて傳る安殺の安奈と葛葉とを
たらーく伝すー手紙ぞう

繪本金花談　十二冊

文学堂蔵

同金毘羅神霊記　十冊

同誠忠傳　十冊

同孝感傳　十冊

同顕勇録　十冊

同奇縁傳　十冊

同忠孝美善録　十冊

同伊賀越孝勇傳　七冊

三男　檀之二葉　六冊

鎌倉年代圖會　五冊

教経御鎌倉の創業より宗尊親王の下向
まで総て将軍家五代の間の時事を委
くしるせり

鎌倉大樹家譜　五冊

宗尊親王鎌倉へ着御より累世執権秩
序の次第北條が一門亡びて後醍醐帝天下を
平定し給まで記す

同孝感傳　十冊

同顕勇録　十冊

同奇縁傳　十冊

同忠孝美善録　十冊

武蔵坊辨慶異傳　十冊

産婆中が水滸伝の面目を換て変化せる
趣向あれば甚興ある小説なり

大内多々羅軍記　六冊

大内義隆の孫奢風流より嬖臣相良武任が
佞智浪人服部を跟ふ脳れ妻を君に進

同伊賀越孝勇傳　七冊

三男　檀之二葉　六冊

文学堂蔵版

ひるす 妖婦 生弱の方ゑす 陶尾張宮曉翼が
大悪逆ゑと正史に出入せる面白記稗史あり

近江縣物語　五冊

花山院の門代ゑるとう 坂上梅丸が全傳 ゑ
盗賊義系保輔 齋明が残暴 橋安進がす
女園生が貞操 安世が錫常くが邪欲 腸病のす
梅丸むくり沢 敦光銘伝を謂 てあり 賊徒征伐
の大将軍義系保昌を助けて賊を平らげ 絵ゑ
近江掾ゑ進み生の父母ゑ逢 一種話 ゑてその
文の妙ゑるす 閲して知るべ

昔語松虫墳　六冊

建武の治 浦ゑ河紀 世の勇士 野田太郎清系氏安
武勇 妹 桂子ゑす 継母 楓が奸淫 安井 隼太が隠
悪 支田勝美義里ゑす 世田の家伝 木津添八が妻
松女が狂死 木津添太郎ゑ非崎の遊女 梅木が孝心
松虫墳 経塚ゑとの由来をゑる

奥州小白屋の呂 篠崎三郎右衛門 ふ ふもの
千田民弥を欺 て松田伊織 に斬せ 松
出夫婦と民弥が 茅民弥が義 死 ふ 寃魂
民弥が庶子民五郎 ふ童 ゑ 憑て復讐
させ ゑを 操せ

北野霊験 二葉の梅　六冊

賊 の 玄 賊 池上七九郎 が 兇悪 の す 孝子
菊女と上田 芝三郎 が 復讐 の 小説 て 悪少
年岩見三之亟 義侠 の 老人 を 教 ゑ す ゑ と
を 綴 ゑ ゑ の も ゑ

報怨と珠玉話　十かえ王花　六冊

建久年中 ゑ や 出羽の山縣の郷士常盤井内記泰
兼則 ゑ 二男 雛二郎 美人 ふ 仙郷 に 誘 れ て 教 と 支
け 後年 諸 茅 を 助 け て 父 の 仇 を 山伏 山 ゑ 討 て
仙女去来 見 と 昇天 ゑ る 奇 説 奇 ふ べ

今戸井二牧絵州紙　六冊

天文の頃 ゑ と 播磨國三木の城主別所長宗の 臣
花崎兵 夫 女子 あり と 美少年 孤山 義 ゑ す
遠原勇義 す 瓶松三郎左衛門 が 奸悪 ま て 高
村の俳優 ゑ が 義 血 ゑ と り 絶 る 話 ゑ 奥 あり

矢口續話 新田神霊 **忠孝貞婦傳**　六冊

大庭伊織 信濃 八限田段右衛門 が 姦計 ゑ 中 ら
て 自害 し 妻 の 里 と 家隷 巻田 罰助 が 貞烈
忠勇 ゑ て 寃 を 雪 ぐ 一 茅帝 ゑ り

復讐千丈松　七冊

近江の七 松井逸当 浪人 篠村 大義 ゑ 欺 殺
れ 一 茅 両人 多年 寃家 を 窺 ひ 青柳佐市
友 ゑ も ゑ 阿波の篠村 ゑ て 志 と 遂 し 傳 ゑ

忠孝人龍傳　五冊

補家外傳 **弥生佐久羅**　六冊

補家の長伝恩地左近 が 女児 弥生 ゑる 佐倉源八
佐倉氏八庫 が 相 死 ま す 子 源二郎 が 胆勇 敢 寺 の
妖 を 除 死 又 池田の里 ゑる 福富 が 女児 白 雪 と の 所
遇 松系軍 ゑ が 騙 術 秋山大膳 ゑ 縁 反 八尾 雷
童 丸 が 滅亡 源八 逃 の ゑ 話 と の べ る

骨董新話 **花標因縁車**　五冊

小鐘半 ゑ 湧 ゑ る ふ 小金 と 彦 麿 と 伴 て 色 界
る 迷 ふ 煩悩 の 常 念 法 師 が 乃 下 の 塚 の 因 縁 と
怪 く ゑ る も

玉掻頭　五冊

三光の獅 ゑ を 主 と ゑ る 沽 説 す て 上野の國
高井土の呉服 屋 十 ゑ 湧 寄 あ の 衰 と 再 興 ど ん
し 上方 ゑ 出 て 百 方 ゑ 操 死 後 ま 三百 銭 両 の 金
を 携 帯 ら 路 摺 針 山 賊 ゑ り 強盗 鬼四郎 ゑ る 跟

繡像復讐山石見英雄録 全部 五十冊

南溟 玉藻 主人 編輯

浪花 一蕚 歌川芳梅 画

○初編 兼師人作 七冊 ○二編 玉藻主人調著 ○三編 京陽子嗣著 ○第四輯以下作者一家

永禄天正の頃紀州名嶋の豪士岩見重太郎橘種李が生さちより武者修行せし世の義功大蛇の害を除き老狸の妖を殺めし勇威を張り後ち天の誅を受くし

廣澄成澄大川ホ三人の大敵を殺して父兄の怨恨を晴し絶ホ室町殿に奉仕て任官し給ふ木王水正ヨ浪蟹ゆるを問ふ言聖峯豪ゲ岳那濡婦岩瀑孝女新月ホゲヲ給ひ黨の五雄と称する勇士の列伝霊猿悪魚の怪談ホ五輯ありい益入佳境新話多り

南久寶寺町心齋橋ゆ入

浪花書肆 伊丹屋善兵衛 板

紀州の士人東條図書幼年にして父助を失ひ仇山中壮二郎を年久しく伺ひ獲り後ホ和州郡山まで復讐せし事実を録して弱常の傳奇冊紙に足り

南部小栗忠孝記 五冊

敵討

奥州南部の士竹内新吾同藩ホ新参の士小栗平を猜み窃ホ人をして討殺させしホ小栗が後妻助絶ホ手使拙をきゝ得て阿波ホ赴き主の妻ホ告知らせて小栗百二郎ホ悉く父の仇を討せし事実多り

長崎聞見録 五冊

理齋隨筆 六冊

和漢の雜事何れも多く載られたれば世ゴ俗益鮮ゆ

金屋金五郎全傳 五冊

浪花堀江の市人金五郎が風情あって義侠ある南妓額の小三が情実の膝を乞べ泥ゴ紙半時渭左房門が癖性の可笑き法ホ半時庵陰ゴ星ゴ郎人ある の一ホ説多り

輪廻物語 五冊

安倍仲麻呂吉備大臣ホの流唐より安名と葛葉がゴ晴明を海ゲ多ゴ悪く俗境の作る話をいそ紙ホ とゴ浮屠陰陽両ホ邪乃説を附会ゴ ゴる ホ説荒唐ゴて架空の結構 自ら和漢の史外ゴ出ゴ奇話といえべゴ

風流茶人氣質 五冊